一本の縄からしめかざりへ

一本の縄がしめかざりへ変化する過程を、「歴史」と「造形」を並べることで表現しました。「造形展開図」とは、一本の縄がさまざまな「かたち」へ変化する際に、どのような手法や思考プロセスがあったのかを考察したものです。つまり、歴史は「社会」を時間軸に、造形展開図は「作り手の思考」を時間軸としています。

誇らしげな「縄」

縄文時代

縄文土器の縄目文様は、「蛇」を象るとして呪術性を説くものが多いが、解明はされていない。
しかし、さまざまな文様を表現するために、縄の製作方法には多くのバリエーションが編み出されていたことがわかっている。
例えば、多縄文（2 束の縄綯で綯う）、多条縄文（3 ～4 束の縄綯で綯う）、付加縄文（縄にさらに縄を巻きつける）、羽状縄文（右撚りと左撚りの縄を交互に施す）、撚糸文（縄を棒に巻きつける）など。
繊維状のものを「縄」にするという人類の根源的な手法は、すでに高い技術を持っていた。

能登健は著書「縄文時代」で縄目文様についての所感をこう記す。
「命の糧としていうべき最も大切な生活用具である土器に対して、執拗に創意工夫をくりかえしている縄文人の姿が浮かび上がってくる。その執拗さからは、命の糧を守るための必死な願いを感じ取ることができる。また、縄の発明を誇らしげに土器に写し取っている縄文人の姿も浮かんでくる。」

素材としてのワラへ

弥生時代・古墳時代

石包丁と稲束（穂の部分が摘み取られたもの）の出土から、弥生時代の稲刈りでは「穂首（ほくび）刈り」が行われていたと考えられる。しかし古墳時代になると、長い柄のついた鉄製の鎌が出土し、『根刈り』の収穫法が行われていたことがわかる。つまり、脱穀したあとに残ったワラが、「素材（材料）」として利用されたことが伺える。

しめなわの登場

奈良時代・平安時代

『万葉集』に「標縄」、『倭名類聚抄』に「注連」としてみられる。
「古事記」「日本書紀」では「シリクメナハ」（尻久米縄、端出之縄）として天岩戸の条に登場する。岩戸に籠ってしまった天照大神を、まわりの神々が協力して引き出し、二度と籠ることがないよう岩戸に引き渡した縄のこと。別名として「左縄」とも書かれており、この時点ですでに「しめなわ」は「左綯い」としていたことがわかる。
「シリクメナハ」は、シリ（藁の端・尻）を出し（クメ）たまま縄とされる。つまり、縄から飾筋かの藁しべが垂れた様子と考えられる。
「注連（ちゅうれん）」は死者の霊が再び戻ってこないよう、水を注いで清めた縄を連ね張ることをいう。そこから日本の「注連縄」の表記が生まれたと考えられる。

正月のしめなわとして

平安時代・室町時代

正月に「しめなわ」を用いるようになった時期は定かではない。しかし、「土佐日記」の正月の項に「小家の門の端出之縄（シリクメナハ）」とあり、少なくとも この頃には正月にしめなわを用いていたことがわかる。
「洛中洛外図屏風 上杉本」では、軒下に張られたしめなわの様子が描かれている。門松の「松」は大きく、根元に「年木」などと呼ばれる割木が見られる。

部屋「国宝上杉本洛中洛外図屏風」米沢市上杉博物館

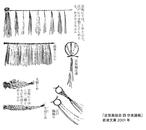
創意と飾り藁へ

江戸時代

「雑国語会釈中行事大成」には前垂れのような造形の神絵が久える。「今日より十五日まで門前左右に各松一枝竹一本を立、上小竹二本を横たへ鶴藁を付」とある。
「和漢三才図会」では「注連縄は神前及び門戸に之を引き張り、以って不潔を避く。其の縄程藁を用ゐ、毎に八寸許りの本端を出す。数七五三藁之れを左に綯う。故に端出の縄と名づく」とあり、藁しべを七本、五本、三本と重らしていたことがわかる。

「守貞謾稿巻二十六」には「近年、江戸にて、稲穂の付きたる藁をもって、輪注連を少し大型に精製し、あるひは奉書紙を蝶のごとく折りたるなど、飾りとなしたるを、床の間あるひは坐敷の内、しかるべき柱などに掛ること、風流を好む家に寄らこれを用ふ」とあり、創意による造形が生まれていることがわかる。また、京と江戸では名称やかたちが違うことにも言及している。

「雑国語会釈中行事大成」（部分）国立国会図書館デジタルコレクション



「日常風俗百 四 守貞謾稿」
岩波文庫 2001年

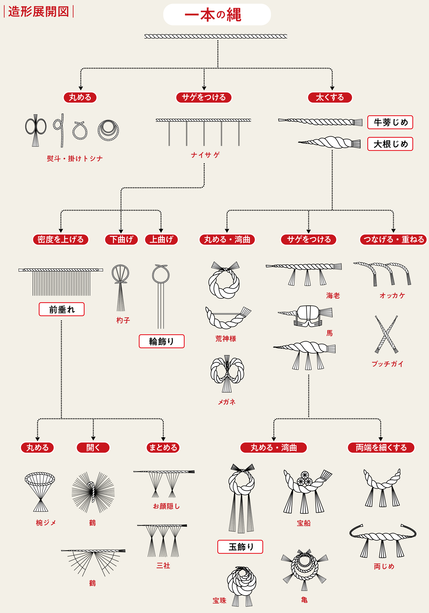
副収入として

江戸時代・昭和時代

江戸の町では歳中火消しが年末の副収入としてしめかざりの藁店を出していた。藁は火消しと兼ねることが多く、いろは 47（の ら 48）組で担当地域を分け、しめかざりの出店場所もその地域内と決まっていた。
私が2015年に下町を歩いた時はまだそれを暗示していたが、現在は露店自体が減っているため、街中で見つけることが難しくなっている。

また、現在のしめかざりに大きく関わってくるのは1969年から施行された「減反政策（米の生産調整）」。米余りの深刻化から、国が米の生産量を調整するようになった。協力した農家には見返金も出るため、結果的に多くの農家が作付面積を減らした。そこで、米を収穫しない「青刈り」の稲が普及、しめかざり用に栽培し、年末にはしめかざりを作って副収入とした。

造形展開図



時代に即して

昭和時代・平成時代

「商品」となったしめかざりは、時代に即して変化し、種類も増えた。
自家用車が普及すると、昭和40年代には「車用」のしめかざりがさかんに販売された。車用しめかざりは交通安全祈願とともに、愛車への一年の感謝をあらわす現代の民具となった。以前は車の前面グリルに付けていたが、最近のものは「吸盤タイプ」に変わり、室内に付ける仕様となっている。「最近は車用も見なくなった」と言うが、車内には意外と付いている。
玄関用のしめかざりも現代風に変化している。特に東京では紅白の紙垂が普通となり、装飾品もダイダイや裏白などの見慣れたものから、洋風の家に合わせたクリスマスリース風などさまざま。インターネットや 100円ショップでも購入できるようになった。
また、最近では環境問題に配慮して「門松カード」という印刷された門松を配布する自治体もある。
作り手も多種化し、海外製も増えた。包装の裏には原産国として中国、韓国、ベトナム、フィリピンなどが書かれている。

かざりのしめかざり

現在

現在のしめかざりは、その名の通り正月の「飾り」として扱われることも多くなった。
しかし、そもそも「しめなわ・しめかざり」は、「飾る」ものではなく「掛ける」もの。掛けるという言葉には「上にあげる、高く掲げる」という意味がある。つまり、大切なものは常に自分より「上」に置いておくという意識がより、神棚・正月棚などは頭上高く設置した。
「心掛け」という言葉も、目標を今の自分より高く掲げることをいう。
今年は、しめかざりを「飾らず」に「掛けて」みてはいかがだろう。

『縄文文化の発掘』(東京書籍社,1977年)/『松山書房新辞典』(松山書房,1979年)/『広辞苑』(岩波書店,1955年)/『新版民俗小事典』(大阪書籍,1979年)/『日の神・稲魂』(日本民俗文化資料集成第三巻,三一書房,1991年)/『日の神・稲魂』(日本民俗文化資料集成第三巻,三一書房,1991年)/『雑国語会釈中行事大成』(国立国会図書館デジタルコレクション)/『日本民俗図会 四 守貞謾稿』(岩波文庫,2001年)/『日本民俗図会』(岩波文庫,2001年)/『日本民俗図会』(岩波文庫,2001年)/『日本民俗図会